

令和 3 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00076

研究課題名（和文）10-14世紀シリアにおける知的空間の変容に関する思想史的研究

研究課題名（英文）The Study of Transformation of the Intellectual Circumstances in Historical Syria from the 10th Century to the 14th Century

研究代表者

菊地 達也（Kikuchi, Tatsuya）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：40383385

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、ドゥルーズ派、アラウィー派、十二イマーム派、ハンバル法学派、神秘主義教団など、10-14世紀の歴史的シリアにおける諸宗派および諸学派の相互関係と対立について考察し、ドゥルーズ派などの思想史的展開に周辺の勢力がいかなる影響を及ぼしたのかを分析し、ドゥルーズ派の思想は思想的源泉と並んでシリアにおける歴史的状況によっても規定されていることを明らかにした。以上の成果は研究代表者である菊地のドゥルーズ派やイスマーイール派に関する論考、著作に反映された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中東におけるマイノリティ宗派については、その内的な思想の発展に関心が集まりがちであったが、周辺の歴史的状況や他の集団からの影響がその内的発展にいかなる影響を及ぼしたのかを多角的に考察することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we investigated relationships and conflicts among various religious groups including the Druzes, the Alawites, Hanbali school of law, Sufi groups, in historical Syria from the 10th century to the 14th century, and analyzed how the sects such as the Druzes were affected by surrounding groups, so that we could explicate that some of the early Druze doctrines were not only by their sources but also by the historical circumstances in Syria.

研究分野：イスラム思想史

キーワード：ドゥルーズ派 アラウィー派

### 1. 研究開始当初の背景

現在のシリア、レバノン、イスラエル/パレスチナ、ヨルダンを含む歴史的シリアにおいては、様々な宗教勢力や学派が混在し、相互に対立することもあれば影響を与え合うこともあった。その中でも、ダマスカスを拠点とするハンバル学派の法学者イブン・タイミーヤ(1328年没)が発出した、ドゥルーズ派、アラウィー派の殲滅を命じるファトワー(法学裁定)は対象となった宗派に深刻な影響を及ぼした。現代において歴史的シリアに国民国家が成立すると、それらの国家においてイスラム主義が台頭し、イブン・タイミーヤのファトワーを参照した両派への攻撃が強まった。研究代表者である菊地は元々、シーア派の一派、イスマール派の思想を研究していたが、近年ではドゥルーズ派、アラウィー派の思想史的研究も手がけており、周囲からの攻撃に晒され自らの思想を変容させざるを得なくなっている両派を目の当たりにし、それぞれの思想史を単体で考察するだけでなく、現代のような状況に至るプロセスと外部からの影響について多角的に分析する必要があると考えるに至った。

### 2. 研究の目的

アラウィー派、ドゥルーズ派研究は長らく停滞していたが、その思想史的研究は**20**世紀後半以降一定の進展が見られた。アラウィー派の研究が進んだのは**2010**年代以降であり、M. M. Bar-Asher & A. Kofsky, *The Nusayri-`Alawi Religion* (Leiden, 2002)と Y. Friedman, *The Nusayri-`Alawis* (Leiden, 2010)が飛躍的に研究を進展させたが、同派聖典群の学術的校訂はおこなわれていない。ドゥルーズ派については、母体となるイスマール派研究の進展を受け、**1980**年代以降幾つかの優れた聖典研究がおこなわれ、**2007**年には D. De Smet の校訂により同派聖典の最初の**2**巻が翻訳されている。だが、両派に関する先行研究の大部分は、それぞれの創始者ハスィービーとハムザ・イブン・アリー(没年不詳)の思想に関するものであり、シリアへの本格的な定住を進めた両者の後継者たちについての研究はほとんどない。

本研究において申請者は、両宗派の聖典を構成する書簡群の中で明らかにシリアへの定住後に書かれたものを取り上げ、そこに見られる主張と両派の創始者の主張を比較することで、両派が新しい環境にいかに対応し変質していったのかを分析することを目指した。より具体的には、別の地域から移動してきたアラウィー派とドゥルーズ派が歴史的シリアにおいてどのように変質したのか、それが同領域内の他の勢力にどのような影響を与えたのか、イブン・タイミーヤの過激な主張は歴史的シリアにおけるどのような思想史的文脈を踏まえて生まれたのか、という三つの問題群を設定し、研究分担者と協力しながら調査・研究をおこなった。

### 3. 研究の方法

ドゥルーズ派とアラウィー派が他集団に与えた影響については、まずアラウィー派とドゥルーズ派が互いに論駁し合っている書簡が参照可能であり、アラウィー派やドゥルーズ派がシリアに移動してきた状況に関する歴史資料なども活用することで、シリアへ

の移動が両派に与えた影響、両派の移動がシリアの他の勢力に与えた影響について考察することを旨とした。ドゥルーズ派とアラウィー派を激しく攻撃したイブン・タイミーヤとその後の時代に生きる法学者が両派に対して出したファトワーについては、Y. Hazran, “Heterodox Doctrines in Contemporary Islamic Thought,” *Der Islam* 87 (2010)が整理しているが、イブン・タイミーヤ以前についてはほとんど先行研究がないので、この問題については、イスラム法学を専門とする研究分担者である柳橋教授と協力しながら調査を進めた。

以上のように、これまで十分に研究されていない①～③をテキストに基づいて解明しようとする点に本研究の独自性があったと言える。さらに、これらの問いに答えるために(a)アレッポとその周辺、(b)ダマスカス、(c)レバノンの山岳部という空間上の枠組みを設定しているという点も独特であろう。(a)では、アラウィー派や神秘家ハッラージュ(922年没)の信奉者集団など、イラクを逃れてきた集団が活躍する、独特の言説空間が形成されていた。(b)は正統的なイスラム法学の拠点であり、イブン・タイミーヤを生み出す母体となった場所としても重要である。(c)はドゥルーズ派や十二イマーム・シーア派といった少数派が割拠する場所であった。本研究では、アラウィー派、ドゥルーズ派の聖典テキストなどを分析しながらも、その内容をそれぞれの地域の文脈の中に位置づけることを試み、さらに、「異端」的集団が闊歩しているかのように見えるであろう(a)(c)に対して(b)の法学者がどのような見解を提示したのか、など地域間の相互の影響関係をも視野に入れた。

時代や地域の設定が後半であり、様々な思想領域にまたがる研究であるため、本研究においては十二イマーム派思想と神秘主義を専門とする鎌田繁・東大名誉教授、イスラム法学を専門とする柳橋博之・東大教授、神秘主義を専門とする井上貴恵・東大助教(現在は明治大学文学部専任講師)に研究分担者を依頼し、それぞれの専門分野について研究を進めてもらいつつ、研究代表者の専門外の領域については適宜アドバイスをいただいた。

#### 4. 研究成果

本研究における最大の成果は、研究代表者の単著『ドゥルーズ派の誕生：聖典『英知の書簡集』の思想史的研究』刀水書房である。この著作は残念ながら研究期間中に間に合わず**2021年6月**の刊行(予定)となってしまったが、ドゥルーズ派の共同体がシリアに移動したことによっていかなる思想的変容が起きたのか、という問題についても分析している。この分析によって、シリアへの移動が輪廻(タナスフ)の教義および信仰隠し(タキーヤ)の教義を成立させたことが明らかとなった。また、アラウィー派とドゥルーズ派の論争についても本書は取り上げており、シリアへの共同体の移動が両派の対立を生んだこと、当時のアラウィー派の輪廻思想とドゥルーズ派との違いについて解明することができた。

また、**2019年**に刊行された研究ノート(翻訳)「『英知の書簡集』宇宙創成論：「真理の開示」翻訳(2)」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』**50**号は、ドゥルーズ派創始者ハムザ・イブン・アリーの書簡「真理の開示」の翻訳であり、この書簡はエジプトで書かれたものであるが、ドゥルーズ派の基本教義と世界観が示されており、ドゥルーズ派思想を考える上で欠かせない著作である。

**2020年**刊行の「イスラームにおける正統と異端」伊藤邦武ほか編『世界哲学史**3**：超越と普

遍に向けて『筑摩書房は、ドゥルーズ派の母体であるイスマーイール派の思想を取り上げている。これは一般向けに書かれた非学術的著作であるが、ドゥルーズ派とアラウィー派に共通する極端派（グラート）の伝統についても分析している。

以上の成果より次のような結論が得られた。ドゥルーズ派とアラウィー派はともに、8世紀のクーファ（イラク）に端を発する極端派の伝統の中から生まれたが、ドゥルーズ派創始者ハムザが直接的な影響を受けたのはイスマーイール派内の新プラトン主義的教義であったため、ドゥルーズ派の宇宙論は、アラウィー派とは違い哲学的な枠組みと用語が取り込まれている。両派の教義の共通点としては、神が特定の人間に受肉すること、天上的存在者の過ちが宇宙創出のきっかけとなったことなどが挙げられ、これらの要素は元を辿れば極端派の伝統に行き着く。しかし、哲学的教義の流入が影響し、アラウィー派とは違い、ドゥルーズ派では輪廻を原初の過ちに対する罰という認識は生まれず、これが両派の輪廻思想の違いにつながっている。ドゥルーズ派の輪廻思想は、シリアに閉鎖的共同体が形成されたことが直接的なきっかけとなって生まれたと推測されるが、そのような状況によってすべてが規定されたわけではなく、思想的源流の違いによる影響も大きい。アラウィー派は極端派的伝統により近く、教義の哲学化もおこなわれなかったこともあり、同派の輪廻思想では輪廻自体が罰とされ、非人間への転生も許容される。

ドゥルーズ派の信仰隠しの教義もまたシリアへの移動がきっかけとなって誕生した教義であり、ハムザ書簡に明確な根拠が見出せない。この教義はアラウィー派にも見出せるが、両派の間で決定的な違いはないようである。この教義は十二イマーム派、イスマーイール派にも見受けられ、シーア派系諸派共通の教義となっている。

以上のように、研究代表者の研究によって、シリアへの移動という物理的、歴史的事象は明らかにマイノリティ宗派の思想を変質させたが、思想史上の影響関係によっても宗派の思想は規定されていることが分かった。研究分担者である鎌田、柳橋、井上も、本基盤研究のテーマと関連づけながらそれぞれの専門領域に関して発表や著述をおこなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 「イスラム教の説く死後の世界」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大法輪』	6. 最初と最後の頁 85-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 「イスラム教の「神」観」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大法輪』	6. 最初と最後の頁 99-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 87-6
2. 論文標題 「イスラム教の靈魂観」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『大法輪』	6. 最初と最後の頁 121-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳橋博之	4. 巻 90
2. 論文標題 「ハディースの計量的分析の試みーブハーリー『サヒーフ』を資料として」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『西南アジア研究』	6. 最初と最後の頁 77-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/seinan-asia-kenkyu_90_77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鎌田 繁	4. 巻 38
2. 論文標題 「井筒俊彦とイスラーム神秘哲学」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『宗教哲学研究』	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上貴恵	4. 巻 2
2. 論文標題 「スルタン・ヴァラド著『マアーリフ』序文, 第1章及び第2章翻訳」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『イスラーム思想研究』	6. 最初と最後の頁 71-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地達也	4. 巻 50
2. 論文標題 「『英知の書簡集』の宇宙創成論: 「真理の開示」翻訳(2)」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』	6. 最初と最後の頁 243-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鎌田 繁
2. 発表標題 「イスラーム思想と井筒俊彦」
3. 学会等名 宗教哲学会第13回学術大会 シンポジウム: イスラーム思想と井筒「東洋哲学」(オンライン大会 [Zoomミーティング]) (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鎌田 繁
2. 発表標題 「井筒「東洋哲学」におけるモッラー・サドラー存在論の位置づけ」
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会（パネル：宗教研究における井筒「東洋哲学」とその展開）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鎌田 繁
2. 発表標題 「イスラームと仏教 比較の視点をどこにおくか」
3. 学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター主催 龍谷大学380周年記念シンポジウム「仏教・イスラーム・キリスト教の交流に向けて 比較宗教の視座から」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳橋博之
2. 発表標題 "Reconstructing the Reformulation of Hadith"
3. 学会等名 The Meaning of the Sacred Texts（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上貴恵
2. 発表標題 「陶酔系スーフィーとその倫理性 シyamセ・タブリーズを中心に」
3. 学会等名 日本オリエント学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳橋博之
2. 発表標題 イスナードの定量的分析の試み
3. 学会等名 日本オリエント学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 ジョン・L. エスポズイト(著)、八尾師誠(監訳)、菊地達也・吉田京子(訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 xi+378
3. 書名 『オックスフォード イスラームの辞典』	

1. 著者名 伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 『世界哲学史3：中世I 超越と普遍に向けて』(第6章「イスラームにおける正統と異端」、127-150ページを担当)。	

1. 著者名 鈴木重(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 372
3. 書名 『侠の歴史 西洋編+中東編』(「ハサン・サッバーフ」、246-259ページを担当)	



1. 著者名 鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 826
3. 書名 『中東・オリエンタ文化事典』(「新しい生き方、イスラームおよび「カリフに神を見たドルーズ教」を担当)	

1. 著者名 伊藤邦武・山内史朗・中島隆博・納富信留(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 『世界哲学史3：中世I 超越と普遍に向けて』(第6章「イスラームにおける正統と異端」、127-150頁を執筆)	

1. 著者名 神崎忠昭・野元晋(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学言語文化研究所	5. 総ページ数 312
3. 書名 『自然を前にした人間の哲学 - 古代から近代にかけての1 2 の問いかけ』(「キトミール考 - イスラーム文化圏における犬と人」、137-162頁を執筆)	

1. 著者名 澤井義次・鎌田繁 (編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 382
3. 書名 『井筒俊彦の東洋哲学』(「「東洋哲学」とイスラーム研究」、pp.11-32を執筆)	

1. 著者名 Hiroyuki YANAGIHASHI	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 628
3. 書名 Studies in Legal Hadith	

1. 著者名 鎌田 繁	4. 発行年 2019年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 284
3. 書名 東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報 2019（死生観と看取り）』（「イスラームにおける死自殺、殉教、安楽死」）、pp.29-46を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鎌田 繁  (Kamada Shigeru)  (70152840)	東京大学・東洋文化研究所・名誉教授   (12601)	
研究分担者	柳橋 博之  (Yanagihashi Hiroyuki)  (70220192)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授   (12601)	
研究分担者	井上 貴恵  (Inoue Kie)  (70845255)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教   (12601)	2021年4月より明治大学文学部専任講師。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------